湾時景

ひとつではない時間感覚への意識が
千年続く気仙沼の風景をつくっていく

災害の記憶を風景として継承するということは、ただ悲しい負の記憶の痕跡を標本化することではない。
災害の記憶を風景として継承するということは、自然のサイクルを認め、それと向き合い関係し合う姿が
代々引き継がれていくことである。

私たちは、離れてしまっている自然と人間の関係、時間感覚、サイクルを認識させるようなきっかけをつくることで、
自然と人間が共存していく風景がこの地に続いていくことを目指す。

かつて海とまちをつないでいた JR 気仙沼線が走っていた大谷海岸の空間形態を生かし、、
時計という一つだけの基準の中で私たちは生きているわけではないという気づきを与える、
大きな自然の時計装置をこの場所に提案する。

2011 年 3 月 11 日、まちを海が襲った。
それでも、気仙沼の漁師は言う。

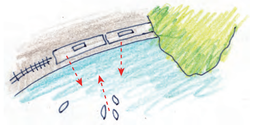
「やっぱり海が好きだ。

いまが何時とか何曜日とかで生きていない。
海が俺たちの暮らしの中心だ。」

(気仙沼で生まれ育った漁師　オオハラさんの言葉)

01. 背景 _ 海と人々を繋いでいた JR 気仙沼線。

震災前、海辺を走る電車の音は漁師たちに定刻を知らせ、また電車に乗る人々は車窓の風景から暮らしの身近にある海、自然、地域の生業の様子を感じた。JR 気仙沼線は、この地域の人々と海、自然をゆるやかに繋いでいた。

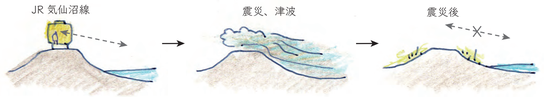


漁師は波音に混じる電車の音でお昼の時間を知り、
電車に乗る人々は車窓から海を見た。

私たちが「漁師さんたちは、毎日どんなスケジュールで動いているのですか？」と質問すると、彼らは迷いなくこう答えた。「スケジュールなんて決められないよ。海を見て、俺たちの行動は決まる。」
自然と共存しながら生きる姿が、ここにはいまも引き継がれている。

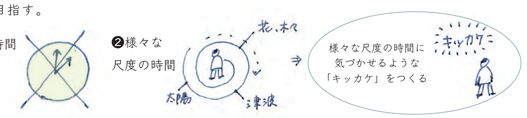
02. 現状の課題 _ 海のまち気仙沼、海を知らない子供達、海を敬遠する大人たち。

震災後、海辺を走る電車は廃線となり、この地域の人々と自然のゆるやかな繋がりも失われてしまった。海岸には巨大な堤防が建てられ、震災で傷ついた人の心には海への恐怖が強く宿っている。大人は子どもを海に近づけるのを躊躇い、海のまちの子どもたちは海や自然を正しく知れないまま大人になってしまう。大きな自然と隣り合って暮らす環境下では失ってはならないものである自然と人間の関係、自然のなかに流れる時間感覚、サイクルに、人々は気付けないまま、時が過ぎてしまうだろう。



03. コンセプト _ 自然の時間感覚に気づく”きっかけ”を再構築する。

災害の記憶を風景として継承していくためには、自然の負の側面、悲しい記憶だけを思い出すのではなく、自然のなかにある時間感覚、サイクルと向き合わなければならない。
私たちは、離れてしまっている自然と人間の関係、時間感覚、サイクルを認識させるような”きっかけ”をつくることで、自然と人間が共存していく風景がこの地に続いていくことを目指す。



04. 対象地 _ 自然の時計装置となるようなポテンシャルを持つ大谷海岸。

対象地は、JR 気仙沼線の廃線となった区間の一部である大谷海岸。
北を背に海を抱くようなこの湾の地形は、自然の時間装置のようなポテンシャルがある。
また、２つの漁港に挟まれた湾であり、自然と共に成立してきたこの地域の生業を感じられる場所である。

▲湾内の各地点における可視領域解析の結果。

＊1…上図に示すように、湾内の各地点に立った時、湾内を走る廃線と湾全体が見渡すことができる。

05. タイムスケール _ 自然の時計装置で感じられる時間感覚、サイクル。

Ⅰ. 鏡時景

❶海岸に堤防が建てられていくこと。

❷海の背後にある山の木々が芽吹き色づき散ること。

一年をひとつのサイクルの単位とし、続いていく。

❸人間が歳を重ねていくこと。

人はみな、生まれて死んでいく。

Ⅱ. 橋時景

❹人が立ち入らなくなった場所に雑草が繁茂していくこと。

遷移の中で成長、そして再生していく。

❺土地が嵩上げされていくこと。

生きる術を考え、地形が変わっていく。

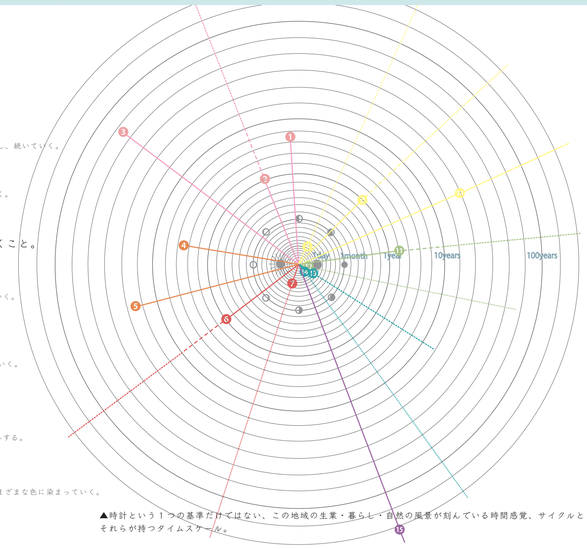
Ⅲ. 船時景

❻渡り鳥がやってくること。

気仙沼でカモメやコクガンが越冬する。

❼日の光で海が色づくこと。

一日の中で、日の光によってさまざまな色に染まっていく。



▲時計という１つの基準だけではない、この地域の生業・暮らし・自然の風景が刻んでいる時間感覚、サイクルとそれらが持つタイムスケール。

Ⅳ. 港時景

❽海の表情を見て漁師が活動すること。

❾旬の幸をいただくこと。

❿世代が変わっていくこと。

次の世代への繋がっていく。

Ⅵ. 暗時景

⓫自分の心が変化すること。

傷ついたり癒されたり、心が刻々と変化しながら私たちは生きている。

⓬お酒が熟成されていくこと。

日本酒を熟成させてたのしむこの地域の生業。

Ⅴ. 待ち時景

⓭草花が風に揺れ動くこと。

毎日変わる天候のリズムで草花は揺れ動く。

⓮BRT(バス) が定刻で走ること。

実社会時間に合わせて規則正しく走る BRT。

Ⅶ. 辿時景

⓯まちの風景が変わっていくこと。

まちの風景の変化に気づいた時、その歴史を知る。

06. 全体図

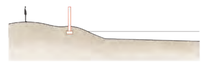
■MASTER PLAN S=1:4000

Ⅰ. 鏡時景（かがみどけい） ―鏡に映る、時間感覚への気づきを与える風景

10:00

大谷海岸の浜辺と海に、風景をうつしだす鏡とディスプレイを設ける。鏡に写る今の自分や風景、ディスプレイに映る過去の人々や風景を見ることで、このまちの風景の変化、時間の流れを感じることができる。または、このまちの変わらないところに気づくかもしれない。さまざまなスケールで、このまちの時間による変化、そして今の自分を見つめ直す場所。

①近景：距離１０ｍ

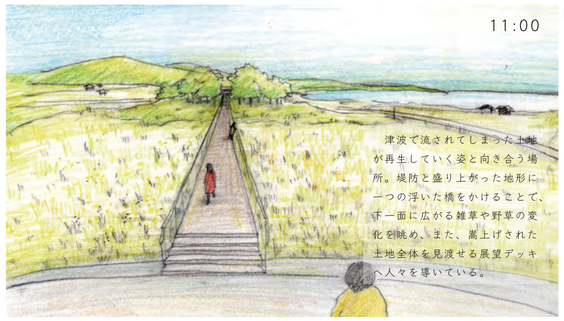


②中景：距離２０ｍ

③遠景：距離４０ｍ

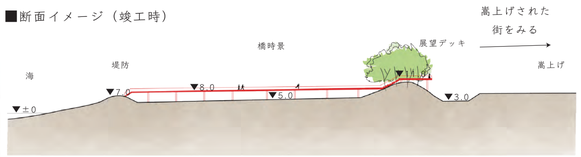
Ⅱ. 橋時景（はしどけい） ―植物の成長により、時間感覚への気づきを与える風景

11:00

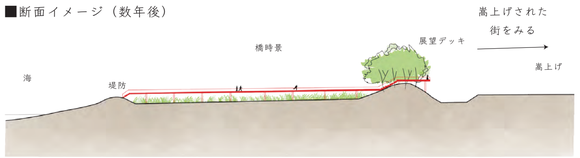


津波で流されてしまった土地が再生していく姿と向き合う場所。堤防と盛り上がった地形に、一つの浮いた橋をかけることで、下一面に広がる雑草や野草の変化を眺め、また、嵩上げされた土地全体を見渡せる展望デッキへ人々を導いている。

■断面イメージ（竣工時）

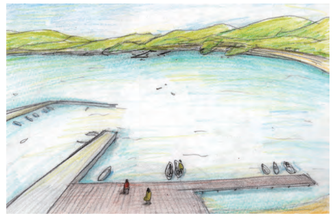


■断面イメージ（数年後）



Ⅲ. 船時景（ふなどけい） ―船の上で体験する、時間感覚への気づきを与える風景

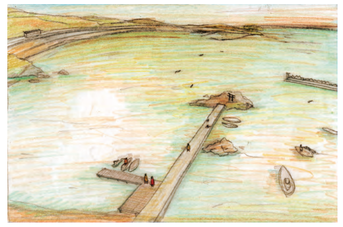
12:00
三島漁港付近



大谷海岸東側に位置する三島漁港付近に船乗り場を設ける。人々は船に乗ることで、囲まれた湾、自然の只中にいる感覚をさらに感じることができる。海という時の流れがあるところから、普段自分がいるところを眺める体験のある場所。

西側に位置する日門漁港付近は背後の山々をつたって海へおりてくる西陽が美しい場所。夕暮れどきに降り立ち、自分がもといた漁港に目を向けてみる。同じ漁港付近だが、海岸の端から端へ移動したことによって、日の受け方が異なる海を眺めることができる。

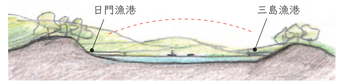
17:00
日門漁港付近



■漁師さんとのプログラム

リタイアした漁師さんたちは、引退後も船によくのる。そんな漁師さんたちが営む、大谷海岸限定船乗り場である。

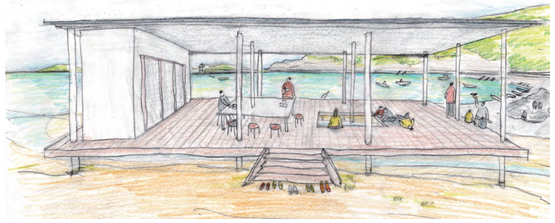
■三島～日門広域断面ダイアグラム

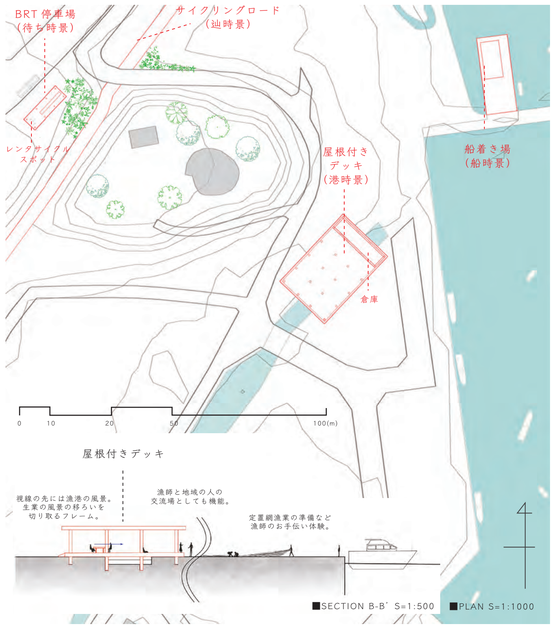


Ⅳ. 港時景（みなとどけい） ―生業の移ろいにより、時間感覚への気づきを与える風景

14:30

生業の移ろいが見渡せる場所に周辺住民と漁師が交流できるスペースとしてワークショップなどを開催できる空間を設計した。この場所には学校帰りの学生が遊びに来て、漁師さんたちとおしゃべりしたりしながら幼い頃から海と仲良くなることができる。



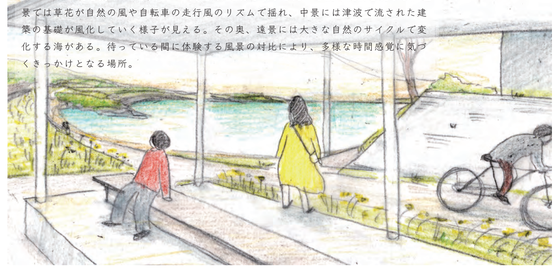


■SECTION B-B' S=1:500 ■PLAN S=1:1000

Ⅴ. 待ち時景（まちどけい） ―待合により、時間感覚への気づきを与える風景

14:00

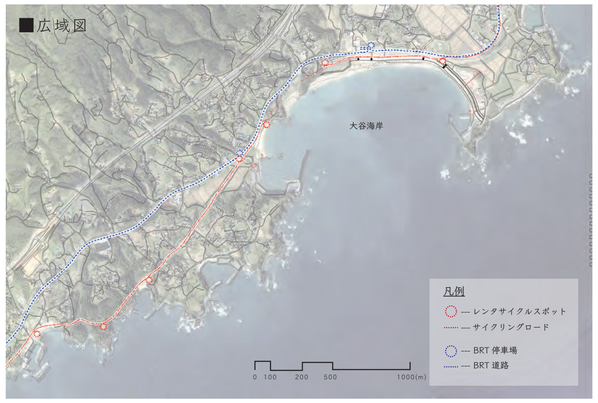
BRT の路線と JR 気仙沼線の廃線が近づく、日門漁港付近のこの場所に、新たな BRT の停車場を設ける。人はここで、BRT を待ちながら海へと続く風景を眺める。近景では草花が自然の風や自転車の走行風のリズムで揺れ、中景には津波で流された建築の基礎が風化していく様子が見える。その奥、遠景には大きな自然のサイクルで変化する海がある。待っている間に体験する風景の対比により、多様な時間感覚に気づくきっかけとなる場所。



Ⅵ. 迎時景（むかえどけい） ―迎える体験により、時間感覚への気づきを与える風景

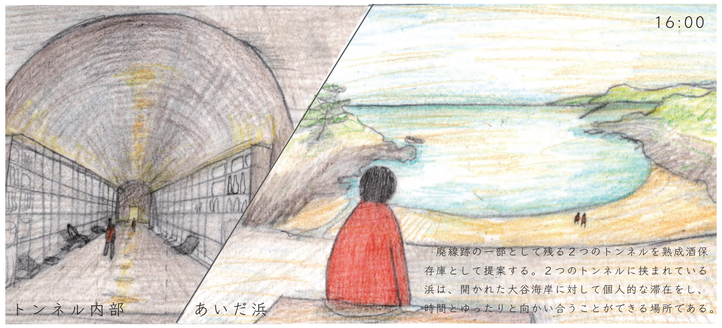
点在する”時景”をたどりながら、廃線上を走るサイクリングコース。人々はここを日常的な動線としても利用することで、まちの風景の変化や、自然のささやかな変化に敏感に気づくかもしれない。ところどころにレンタサイクルスポットを設けながら、大谷海岸だけでなく JR 気仙沼線の廃線区間全域、さらには他の地域のサイクリングロードへと続いている。

■広域図



Ⅶ. 暗時景（あんどけい） ―暗闇という環境が、時間感覚への気づきを与える風景

16:00



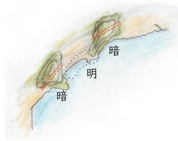
廃線跡の一部として残る２つのトンネルを熟成酒保存庫として提案する。２つのトンネルに挟まれている浜は、開かれた大谷海岸に対して個人的な滞在をし、時間とゆったりと向かい合うことができる場所である。

■プログラム

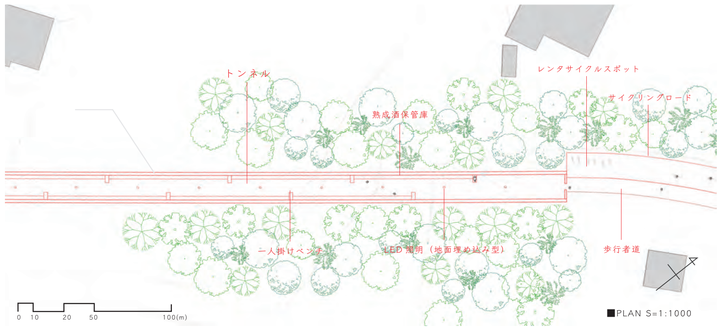
熟成酒保管庫

親から子へと、大切な人へ、時を経て送るプレゼントとして熟成酒を廃線トンネルを利用して光が制限された空間の中で数年後という時間感覚を想起させる場所を提案する。

■全体構成



２つのトンネルに挟まれた場所の特殊性を生かして、暗いところから明るみへと出てきたとき、劇的な風景転換をもたらし、太陽の光というものをより体感する場となる。



■PLAN S=1:1000